■卒業論文概要■

香月泰男、その画業と故郷への思いについて

■惣代智之■

戦争とシベリヤでの抑留体験をモチーフに描いた「シベリヤ・シリーズ」が有名な香月泰男。ここではその香月泰男の生涯と画業、そしてシベリヤ・シリーズについて解説していく。

1　生涯と画業

・誕生から召集まで

香月泰男は一九一一年（明治四十四）十月二十五日、山口県大津郡三隅村で生まれた。家はもともと漢方医の家系で、香月の祖父である春齢は医業の傍ら三隅村の村長も務めていた。香月が四歳になるころ、父の貞雄と母の八千代が離婚する。原因は、貞雄が遊びにふけるようになったことと八千代が義父母との同居生活に耐えられなくなったということだった。これにより、香月は厳格な祖父母と父の代わりに医業を継いだ叔父の手で育てられることになった。

春齢は香月を将来医者にしようと考えていた。しかし香月は小学校低学年のときすでに絵描きになることを決心していた。香月と絵との出会いは香月家の土蔵の中であった。そこには香月家の親類にいた画家の作品や春齢が趣味で集めていた書画などが納められていた。それらの作品に触れ、絵というものに興味を持つようになった。

大津中学四年生（十六歳）のとき、本格的に絵描きになるために東京の美術学校に進学しようと考える。このころ香月は美術学校に行くからには油絵を身につけておかなければと思っていた。香月は津和野にいた母八千代にお願いの手紙を出し、油絵の道具を買ってもらうことに成功する。道具を手に入れてからは、毎日のように絵を描くようになった。やがてそれが祖父の目にとまる。しょうがないという心境になった春齢は、香月を医者にすることを諦め、美術学校進学を許可した。

二浪して東京美術学校に入学。藤島武二教室の学生となった。当時香月は、梅原龍三郎に憧れ、在学中から梅原の所属する国画会に出品をするようになっていた。そして二十三歳のとき『雪降りの山陰風景』で国画会初入選を果たす。この作品は一度落選していたが、梅原と評論家の福島繁太郎の目にとまり、再協議の末、入選した。福島は以後香月を支える父親のような存在になっていった。

美術学校卒業後は北海道の倶知安中学校で美術科教諭を

務めた。この時期は制作の面でスランプにおちいっていた。北海道で二年間過ごした後、山口県の下関高等女学校に転勤する。山口に戻ってきてまもなく、叔父の紹介で藤家婦美子と結婚した。制作も調子が出てくるようになり、次々に入選を果たすようになった。一九三九年の第三回文部省美術展覧会では『兎』で特選もとった。

画家の道を順調に歩みだした香月だったが、一九四二年十二月、召集令状が届く。そして翌年一月に入隊することになった。

・戦中と抑留時代

入隊後、三ヶ月の訓練を経て満州のハイラル地区に送られた。ハイラルでは貨物廠（物資の補給基地）の営繕係（兵舎や倉庫の修理・補修を担当する部署）に配属された。戦地に私物は持ち込んではいけなかったが、香月はこのハイラルにまで絵具箱を持参した。ハイラルでは約二年間過ごすことになったが、その間実戦に参加することは一度もなかった。

一九四五年八月十五日、移動先の奉天で敗戦を知らされる。翌八月十六日、貨車に乗って日本へ向かうことになった。奉天を出て二日後には朝鮮国境手前の安東まで戻った。しかしここで五日間足止めをくらってしまう。その後結局日本へは帰れなくなり、シベリヤに連行されることになってしまった。

一九四五年十月下旬、ソ連領に入りまず三日間の荷役作業をさせられた。このときの労働はシベリヤ・シリーズの『運ぶ人』という作品で表現されている。

十一月になりセーヤ収容所に到着する。翌年の春までの約六ヶ月間をこの収容所で過ごした。ここでは火力発電に用いる薪をつくる作業をさせられた。過酷な労働と厳しい食糧事情で二五〇人いたうちの一割ほどが死んでいった。

一九四六年五月、チェルノゴルスクの収容所に移動する。ここでは絵の仕事や壁塗り作業をした。帰国後の制作のために暇をみては絵具箱の蓋に描きたいモチーフをメモしていった。最終的に十二の文字が記され、帰国後実際にそれらの案から作品がつくられた。

一九四七年四月、帰国が決まる。チェルノゴルスクから貨車でナホトカに行き、ナホトカから引き揚げ船に乗って京都の舞鶴港に向かった。

・帰還以降

一九四七年五月二十四日、三隅の実家に到着する。五月三十一日には早くも下関高等女学校に復職し、二学期から教壇に立つことになった。二学期になるまでの間に『雨』、『休憩』を制作する。『雨』は同年中に『雨〈牛〉』という作品に描きなおされ、シベリヤ・シリーズの第一作になった。

一九四八年三月、三隅に近い深川高等女学校に転任する

ことになり、実家で暮らすようになる。実家に戻った香月は一生をこの三隅で過ごすと決意した。

シベリヤ・シリーズ三作目の『左官』を描いている途中でシベリヤ・シリーズの制作を一度中断してしまう。その後シベリヤを表現するための下地・絵具作りに取り組むようになった。シベリヤを中断している間は台所や人物をモチーフにした作品を手がけていった。作風はキュビズム風の画面構成を取り入れたものが増えていった。

一九四九年には福島繁太郎が創設したフォルム画廊でオープニング展を飾った。以後毎年新作の発表をさせてもらうようになる。

一九五六年になり制作を中断していた『左官』をようやく完成させる。この作品以降、シベリヤ・シリーズの作品は自分で作った独自の下地・絵具を用いて描かれるようになった。また、この年の秋には福島繁太郎の強い勧めで半年間のヨーロッパ旅行にも出かけ、旅先でシベリヤ・シリーズをすすめるためのヒントを得ることができた。

一九六九年、シベリヤ・シリーズに対して財団法人新潮文芸振興会から第一回日本芸術大賞が贈られた。

晩年は絵だけでなく廃材や廃品を使ったおもちゃ作りをしたり萩焼の絵付けをしたりと様々な制作をしていった。また、婦美子夫人を連れて海外旅行によく出かけるようにもなった。作品もよく売れるようになり収入も増えていった。しかし良いことばかりではなく、大好きなワインの飲みすぎで心臓発作に悩まされるようになってしまった。

一九七四年三月八日、心筋梗塞のため自宅で亡くなる。死から九日後、母校の明倫小学校で山口県美術文化葬が行われ勲三等瑞宝章が追贈された。

2　シベリヤ・シリーズについて

シベリヤ・シリーズは、戦争とそれに続く抑留生活での体験や心情を表したもので、全部で五十七点もの作品が存在する。それらの作品の中には、チェルノゴルスクにいたときに絵具箱にメモした十二文字（葬・月・憩・薬・飛・風・道・鋸・朝・陽・伐・雨）からつくられたものも含まれている。

帰還後一作目の「雨〈牛〉」、二作目の「埋葬」と順調にシリーズ作品を制作していったが、三作目の「左官」で一度シリーズの制作を中断してしまう。その理由は一作目と二作目があまりにも明るい色彩の作品になってしまったからであった。シベリヤを表現するには戦前と同じような手法でやっていくのでは駄目だと思うようになり、以後長い間にわたりキャンバスの下地作りや上に塗る絵具作りに取り組むようになった。

様々な実験の末、下地のほうは褐色の絵具に日本画を描くときに用いられる方解末という顔料を混ぜ合わせたものが最適であるということを発見した。絵具のほうは顔料や

染料のほかに石炭や木炭まで使って試行錯誤した結果、赤松の炭の粉末を油で溶いたものが一番ふさわしいということがわかった。この下地や絵具を使い『左官』を完成させた。シベリヤ・シリーズの特徴でもある暗い色彩はこの香月独自の下地・絵具によるもので、以後これらを用いて作品をつくっていった。

シベリヤ・シリーズでは独特な顔の表現が見られる。これは死んでいった戦友たちの顔を表したものでどれもトップライトに照らされたような陰影の強い顔になっている。この顔の表現はヨーロッパ旅行に行った際に見た中世の彫刻からヒントを得て出来上がった。

（芸術文化学科四年）